

介護職員自己評価表

2025年4月2日

事業所名	特別養護老人ホーム うすきの里		正社員	非常勤社員
		社会福祉士	1人	
		介護福祉士	24人	
		介護支援専門員 実務者研修修了者その他 准看護師	3人 13人 5人	1人

※複数資格者含む

◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よく できている	なんとか できている	あまり できていない	ほとんど できていない	備 考
前回の課題に関する改善	22. 2%	40. 1%	34. 0%	3. 7%	

前回の改善計画	
入居者が穏やかな日常を過ごしてもらえる為に、1. 孤独を感じないケア、2. 生活リズムを踏まえたケア、3. 心身の健康を目指すケア、4. ご家族様が参加できるケア、5. AI解析を活用した専門的ケアを目指している。認知症ケアとして、①作業をしながらでも会話に努める、②回想療法などの心理療法の活用、③残存機能を活かした生活リハビリを提供する計画とした。過去の記憶を回帰して話してもらっただけでも一定の効果が見込まれるので、支援のなかで「ちょっとした声掛けや会話」を行なうように努めた。ケアはスタッフの経験やスキルで異なり、一貫性を失うと効果が見込まれないだけでなく、ネガティブな感情を引き起こすことがあることから、社内外の研修によりスキル向上を目指した。	
前回の改善計画に対する取組み結果	
ちょっとした声掛けや会話」にくわえて、近くに「ひと」を感じる関わりを目指して、生活感のある孤独を感じない日常を目指した。入居者の生活リズムは整いつつあり、昼夜逆転などの睡眠障害は減少した。一方、各フロアにひとり、昼に眠気を感じず、夜に目が冴える状態を示す方があり、入眠時間を検討する、或いは、高照度光治療をおこなうなど、体内時計を整える支援を提供した。これらにより、入居者の生活リズムは改善傾向にある。ミッケルアート回想療法や回想ライブラリーは提供できたものの、スタッフのなかには、レクリエーションに苦手意識のある方があり、OJTによりスキルアップを図る必要があった。	

◆今回の自己評価の状況

確認のためのチェック項目(偏差値)		よく できている (60以上)	なんとか できている (50～59)	あまり できていない (40～49)	ほとんど できていない (39以下)	合 計
SECTION 1	対象者の接し方や態度について	20. 6%	41. 2%	35. 3%	2. 9%	100%
SECTION 2	仕事上の態度について	14. 7%	61. 8%	23. 5%	0. 0%	100%
SECTION 3	食事について	23. 5%	38. 2%	38. 2%	0. 0%	100%
SECTION 4	移乗や移動について	20. 6%	35. 3%	41. 2%	2. 9%	100%
SECTION 5	排泄について	23. 5%	41. 2%	32. 4%	2. 9%	100%
SECTION 6	入浴について	17. 6%	44. 1%	35. 3%	2. 9%	100%
SECTION 7	着替えや整容について	23. 5%	32. 4%	41. 2%	2. 9%	100%
SECTION 8	服薬について	23. 5%	32. 4%	38. 2%	5. 9%	100%
SECTION 9	意思疎通について	17. 6%	44. 1%	38. 2%	0. 0%	100%
SECTION 10	行動障害について	29. 4%	26. 5%	29. 4%	14. 7%	100%
SECTION 11	普通の生活やアクティビティについて	29. 4%	44. 1%	20. 6%	5. 9%	100%

自己評価及び改善が必要な事項	
それぞれの評価項目で「できている」と答えたスタッフは、「対象者の接し方や態度」61.8%、「仕事上の態度」76.5%、「食事」61.7%、「移乗や移動」55.9%、「排泄」64.7%、「入浴」61.7%、「着替えや整容」55.9%、「服薬」55.9%、「意思疎通」61.7%、「行動障害」55.9%、「普通の生活やアクティビティ」73.5%であった。ちょっとした声掛けや認知療法、運動やアクティビティにより、生活リズムのある心身の健康につながるケアを、孤独を感じない関わりのなかで提供していると感じている傾向があった。小集団で取り組む回想療法や体操は、入居者の日課として定着し、楽しみのひとつになっている。一方、「できていない」と答えたスタッフは、「対象者の接し方や態度」38.2%、「仕事上の態度」23.5%、「食事」38.2%、「移乗や移動」44.1%「排泄」35.3%、「入浴」38.2%、「着替えや整容」44.1%、「服薬」44.1%、「意思疎通」38.2%、「行動障害」44.1%、「普通の生活やアクティビティ」26.5%であった。移乗や着替えに係るスキル、服薬の知見、認知症による行動障害に関するケアのスキルアップを図る必要があった。	
係長 大坂 高広	

外部評価者	
認知症の事例検討にあわせて関連する心理的課題は内外の研修で行われ、実践的な知見を深めていました。睡眠データを活かして入眠時間を調整し、残存機能を活用した機能訓練として静的・動的ストレッチを提供し、生活リズムが安定した、関節動作や柔軟性が改善した活動的な暮らしを目指していました。入居者の多くが機能訓練の参加意欲が高いことをみれば、介護度の重度化防止としての効果が期待できそうです。写真、動画、絵を用いた回想療法、小集団の体操やコグニサイズは、入居者の日課として定着し、過去のライフイベントを家族から聞き取ったうえで入居者の生活歴を踏まえたケアとして提供されていました。回想療法、顔表情に基づく心理療法等で認知機能の改善を目指すなど、興味深いケアが家族を巻き込み提供されていることは評価できます。一方、コミュニケーションが図れる利用者が多く、比較的経験の浅い介護職員のなかには、コミュニケーションに関する課題が生じやすい傾向がみられました。また、介護技術全般に感じる不安にレクリエーションに関する苦手意識もあり、メンターや主任等の指導に加えて人事部の面談を通じて不安や負担の解消を図っていました。介護職員の負担感は一程度軽減していましたが、主任によるスーパービジョンについては頻度を高める必要があります。総合的な評価は、様々な取り組みが実践され、家族との関係性は良好であることが確認できました。今後も地域に根差した事業所として頑張ってください。	
〒891-0151 鹿児島市光山2丁目3-5 特定非営利活動法人かごしま福祉開発研究所 社会福祉学博士 岩崎 房子	

